

第73回全国英語教育研究大会（全英連愛媛大会）

徳島県立富岡西高等学校 長篠 真紀子

1 大会概要

- (1) 目的：「笑顔つながる英語教育の実現～グローバルな視点を持ったアクティブ・ラーナーの育成～」を大会テーマに、小学校段階から高校卒業段階までを見通した学習と指導の系統性に加え、英語の授業における深い学びを実現するための主体性と協働性の在り方を考える。
- (2) 期日：2023年11月24日（金）・25日（土）
- (3) 会場：【第1日：11月24日（金）】松山市民会館大ホール
【第2日：11月25日（土）】愛媛大学城北キャンパス
- (4) 日程：

【第1日目】

記念講演 演題：「令和の日本型教育における英語教育の在り方 ～期待と課題～」

講師：文教大学大学院教育学研究科 金森 強 教授

校種別授業説明およびビデオによる授業

小学校：発表者 松山市立福音小学校 井上 仁司 教諭

指導助言者 愛媛大学教育学部 池野 修 教授

中学校：発表者 砥部町立砥部中学校 折本 崇 教諭

指導助言者 愛媛大学教育学部 立松 大祐 教授

高等学校：発表者 愛媛県立松山北高等学校 濱松 久美子 教諭

指導助言者 文教大学大学院教育学研究科 金森 強 教授

【第2日目】

分科会

第1部 9：30～11：00 発表者13名

第2部 11：20～12：50 発表者13名

2 内容

(1) 記念講演

講演は小中高の教員を対象にした幅広い内容について、参加者同士のペアワークを交えながらテンポ良く進んだ。金森教授は **Reflection** や即興性を身に付けることが大事であるということや、高次の思考力をつけるために授業でどのような活動を行うべきなのかについても触れられた。例えば、生徒が英作文をしっかりと書けないことに対して、まずは英文を読む時に **TReX** (**Thoughts, Reasoning, Examples**)や **OREO**(**Opinion, Reason, Example, Opinion**)、つまり文章の構成を意識させることが大切であると述べられていた。また、創造力や共感力、人間関係構

築力など、AIにはできないことを生徒が英語学習を通して身に付けられるよう、今後の授業作りを考えていかなければならないと感じた。

(2) 分科会

高等学校における英作文指導に関する発表を拝聴した。概要は以下の通りである。

【第1部第12分科会】

テーマ：自律的学習者を育てる英語ライティング指導～対話型人工知能を用いて～

発表者：愛媛県立新居浜西高等学校 福本 拓真 教諭

助言者：高知大学 今井 典子 教授

内容：英検準1級のライティング指導を希望する高校3年生に過去問題に取り組みせ、添削プロンプトを与えた上で ChatGPT に生徒の英作文を添削させる。元の英作文と添削されたものを比較・分析する。2回目以降は生徒のみで作成・添削・分析する。教師は生徒の取り組みを観察し、ライティングやインタビューを元に評価した。成果としては、生徒は添削の度に分析を試み、辞書や参考書で調べたり、訂正に疑問があれば教師に助言を求めたりするなど、1ヶ月間自発的に学習を継続することができた。また、ライティング力は向上し、英検にも合格した。ただし、今回の試みが合格の決定的な要因ではなく、生徒がそれまでに取り組んできた全ての英語学習の成果であると発表者は述べている。生成 AI による英語ライティングに対するフィードバックは、辞書や参考書の説明を理解できる程度の英語力を有する生徒であれば、有益な学習方法の1つになる可能性がある。ただし、ChatGPT は各生徒のことを知っている訳ではないので、教師が作るプロンプトが重要であり、ChatGPT による生徒へのコメントもあまり励ましているようには聞こえない。人間的なつながりという側面において教師の役割は重要であり、生成 AI の活用方法をよく考えていくことが肝要である。

【第2部第22分科会】

テーマ：自分の考えを英語で表現する力の育成～ICTを活用したライティングの取組～

発表者：愛媛県立今治東中等教育学校 池田 英佐子 教諭

助言者：高知工科大学 長崎 政浩 教授

内容：3～5年生（中学3年生～高校2年生）を対象とし、生徒は Microsoft Teams を使って週1回様々なテーマについて自分の意見を英語で投稿し、1つ上の上級生がフィードバックを行う。5年生のライティングは教師がコメントする。語数は英検3・準2・2級のライティングを基準にしている。最初は期限内に指定された語数でまとめた英語が書けているかどうかを確認することをメインに取り組みせたが、回を追うごとに内容や文の正確性、論理性にも注目してフィードバックを行うようにさせている。GTEC のスコアを見ると、4・5年生は理由や構成がしっかり書けるようになっていた。中には翻訳アプリを用いた英作文をそのまま投稿しているのではないかとと思われるものがあり、今後の課題となった。最初はノートを使って交換日記の形式で行うことも考えたそうだが、提出曜日を決めてもどこかで止まりそうで、Teams ならいつでも投稿可能であることから提出率が上がると考え、本研究内容となったとのことである。長崎教授から accuracy は教師、content は生徒というよう

に役割分担して **peer feedback** を行ってもいいのではないかという助言があった。

3 まとめ

各発表者がそれぞれ独自の視点と方法でより良い授業作りに真摯に取り組まれていた。試行錯誤を繰り返しながら、生徒の英語力向上に少しでも繋がるよう授業を工夫していきたい。